玉名市文化財調查報告 第3集

北牟田塚墳墓

1 9 7 9

玉名市教育委員会



この報告書は、萩原春幸氏宅新築工事にともなって、昭和52年度に実施した埋蔵文化財包蔵 地の発掘調査の記録であります。

昨今、埋蔵文化財の発掘調査件数は急速に増加する傾向にありますが、当教育委員会では、 諸々の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に日夜苦慮しております。

市民の皆様の御協力をたまわり、貴重な文化財を大切にし、次代に継承するのは勿論のこと、 文化財の認識を新たにし、郷土に対する理解を深めることによって文化的に豊かな市民生活の 実現を願うものです。

なお、発掘調査および遺物整理に際して、地主萩原春幸氏ならびに地元の方々をはじめ関係 各位の格別なお力添えとご配慮により、予期以上の成果をもって、本書を発刊する運びとなり ましたことを記し、心から厚くお礼を申し上げます。

昭和54年3月

玉名市教育委員会 教育長 福 原 義 愛

目 次

1.	位	置]
2.	環	境········
3.		間調査に至る経過····································
4.		a調査の過程
5.	あと	がき
図版	ž 19	北牟田塚遺跡
	(上)	北牟田の集落と北牟田塚の位置(矢印)右北塚・左南塚
	(下)	北塚全景(北方より)
図版	ž20	北牟田塚遺跡
	(上)	北牟田塚より望む東方の景観、遠景は伊倉の台地、〇印(上)北塚・手前は南塚
	(下)	北塚全容
図版	z 21	北牟田塚遺跡
	(上)	露出された内部上層の石組と東方を望む景観
	(下)	同上石組拡大
図版	122	上牟田塚遺跡
		内部上層の石組拡大 下の白い部分は下に敷かれた大石
	(下)	大石の引き揚げ作業 遠景は金峰山系、三の嶽(左)、二の嶽(右)
図版	ž23	北牟田塚遺跡
		土坛内北側断面土層
		内部主体の木棺棺蓋
		北牟田塚遺跡
	(上)	木棺棺蓋、杉の皮と板の使用状態を示す 左端は頭骨横断面、上の横長いのは木
		棺棺身左上半部側板の一部
	(下)	同上主部拡大、この部分の下に主体人骨胴部がかくされている
		北牟田塚遺跡
	- N-0	露出清掃された主体人骨の全容
		同上上半身部拡大
		北牟田塚遺跡
		主体人骨下半身部拡大 樫板の木目も鮮やか
		主体人骨 顎骨部拡大 左に縦に湾曲するは左鎖骨
		北牟田塚遺跡
		主体人骨の左腕に付着するひも
	(下)	左腕に付着するひも拡大

調査組織

調	查	主	体	玉名	名 市 教 育	 委員:	会		
			教	育	長	福	原	義	愛
			次		長	小	林	親	教
Ŗ	焦	務	社 会	教育	課長	城	戸	文	雄
			社会	教育課 县	長補佐	灰	本	貞	雄
			社 会	教育	係長	南			悟
			社会(文	教 育 語 化 財 担	果参事 1 当)	内	藤	博	道
発掘調査担当者									
			医名市文(日本考古 ^年		雙委員会会: 会員	長田	添	夏	喜
3	 怪掘詞	問查協	為力者	土地原	所有者	萩	原	春	幸

地元代表者 玉名市北牟田区長

萩

出

原

口

冷

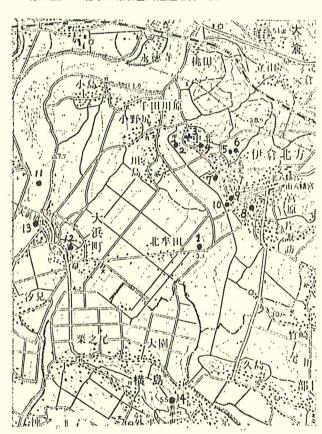
子

北牟田塚墳墓

1. 位 置

伊倉鍛冶屋町の坂を南へ下り、玉名市より横島町へ通ずる道路と正交する十字路を直行し、 唐人川橋を渡って西へ 600 mばかり行くと北牟田の集落にさしかかる道路沿いの右手、西の大 浜町方面から行くとすれば 町の大通りから 郵便局の角を東へ折れ、 有明中学校 (旧大豊中学

北牟田塚墳墓周辺遺跡分布図 第34図



- 1. 北牟田塚
- 城が崎貝塚
- 3. 城が崎城跡

- 4. 中北かめ棺遺跡
- 5. 明人振倉謝公墳
- 6. 本堂山報恩寺跡・宇佐一族墓
- 7. 切支丹墓
- 8. 明人四位官郭公の墓 10. 伊倉港丹倍津跡
- 9. 船つなぎの銀杏 11. 石剣出土地 12. 外島神社
- 13. 大浜港跡 14. 経塚

周辺一帯は東方は伊倉の丘陵地よ り、北方より西方にかけては菊池川 下流、南方は横島山に至る範囲内 の、総面積およそ 105km²にも及ぶ広 汎な全面の水田地帯で、大浜町、川 島、小野尻、小島、北牟田などの大

校)の前を経て、北牟田集落の直線 舗道をさらに東へ行った聚落外れの 左手の、水田地帯の中央を南流する 水路の右岸に二つの小さな封土の塚 があった。5mの間隔をもって南北 に並び、地元では北の塚を荒神さん、 南の塚を塚さん、またはつむしさん と呼んで、むかしから粗末にすると 祟りをうけるといって恐れ、とくに 北の塚はその名のとおり荒い神だと して畏敬されていたらしく、戦前ま では香華を供えてお参りが絶えなか ったという。

境 2. 環

小の点在集落を包雍し、土地も肥沃 で南玉名第一の穀倉地帯をつくって

いる。現在では米造りの一方にはいちご、西瓜、とまとなどを主とする近代的ビニールハウス利用の栽培による進歩的な農業が目立ってきている。この平野の西限にあたる菊池川河口は、国鉄線鉄橋の下流 700~m の地点千田河原付近で西に折れ、さらにそのあたりから下流およそ 1~m にして大きく湾曲して南へ向かい、4.5~m あたりで大浜町と小浜のあいだを経て、末広と共和のところで有明海に注いでいる。

この工事は藩主加藤清正の米の増産から国外移出によって、藩財政の獲得の一助にするとのことから出発して、領内四大河川の改修を行った事業の一つであった。肥後国主として清正が天正16年(1588)肥後に入ると、その翌年より工事を開始し、慶長10年(1605)に至って竣工をみた。その期間が17年、その期間中に計らずも勃発した2度に及ぶ朝鮮の役がある。このため清正の従軍のため工事中止期間の7年間を除いた10年という長い歳月をかけていることが『玉名郡誌』(熊本県教育会玉名郡誌会編 大正12年発行)や、『肥後文化史の研究』(玉名中学校編 昭和9年1月発行)などの郷土史書にのせられている。また横島石塘の潮止工事にまつわる人柱の悲話もこの工事のため、この工事の期間中の出来ごとであった。

なおこのことについて肥後藩講学所で時習館訓導をつとめた大城允氏撰文になる「浄池廟碑」 (加藤清正の墓碑)には、「日菊池川。呑=納迫-及=合志鍋田諸川-。 導至=高瀬-。移=流於 大小浜之間-。西入=千海-。」と記してその事績を顕彰している。

菊池川掘替工事以前に水田地帯があったことは確かであろうが、その広さのほどは皆目分っていない。掘替工事の完成によって小田牟田新地開田の各村の合計石高は5976石が挙げられているほどの結果を生むに至っている。

掘替後の菊池川下流の旧川床は、千田川原付近より南へ、伊倉の城が崎の西小野尻聚落地の東を直流し、伊倉丘陵地の西、丹倍津(旧伊倉港)を通り、尾田の丸池にみなもとを発する九十九曲りで知られる尾田川を併呑して、そのむかし唐船や南蛮船の往来したという説のある唐人川となって、久島山と横島山のあいだを通り、横島集落の東端部を迂回して有明海に注いでいたのであったが、そのあとかたは今なお認められる。北牟田の二つの塚の沿う水路は、菊池川旧川床の一部に当っている。

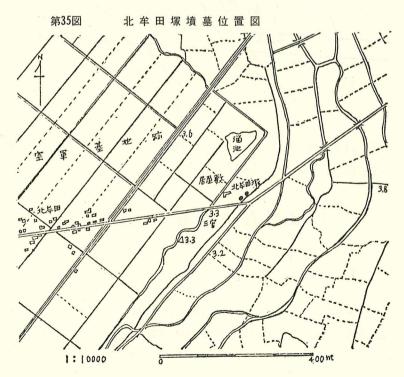
大東亜戦争が起ると、この地域に日本空軍の航空基地が計画され、昭和19年初頭ごろより突貫工事でその計画は遂行され、同時に北牟田集落は全面的に軍に徴発されたため、住民は残らず他所へ移住が強硬に迫られ、伊倉南方やその他の地域に移って行った。伊倉北端にあたる城が崎の山塊はどんどん削り取られ、飛行場建設地へ埋め立てられ、東西 300 m、南北1100 mの広さに及ぶ大浜日本空軍基地は急造された。城が崎の山の上には中世城の遺構や弥生時代の遺跡や古墳などがあり、山の南裾には大規模な貝塚があることがこのときの採土工事で確認されたのであった。だがその時代においてはそのような遺跡など眼中にされなかったもので、ただ戦いに勝つことだけが念頭にあって、みるみるうちに遺跡は崩されていった。現在はその削り

残りのわずかな部分と、破壊のあとの貝がらの散乱が見られる程度となっている。

戦争が終ると飛行場は解除され、間もなく跡地は民間に払い下げられると、一時他所へ移転していた元の住人や、新開地を求めてきた外地よりの引揚者たちによって、新しい家が建ちはじめ、 旧空軍基地はにわかに新たな活気がみなぎり、たちまちにして別の北牟田の集落が新興した。

二つの塚は空軍基地の東北の隅に位置していて、紙一重の際どいところで、期せずして基地から外れていたため、戦争に係わりなく、今日までむかしのままのすがたを止むることができたのはまことに幸であった。戦前の地形をのこしているのは二つの塚のある周辺の一郭だけである。地名(小字)を居屋敷とよぶが、このことも以前からの聚落地であったことを意味している。

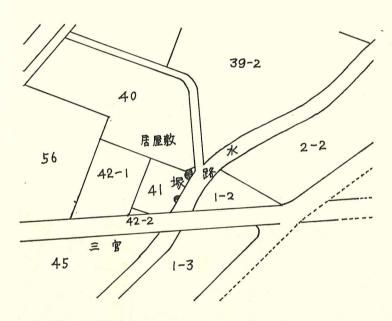
南隣りの地名を三官という。「三官」とは中国の明朝に出仕した官人の階級名から起った呼称がついには地名となったもので、ここのほかに八代や水俣や飽託郡の河内町など、主として河口にのぞむ町にその地名が見られる。これらの人たちが官を退いて、当時日本で豊臣秀吉の財政の立て直しの一策として採用した外貨獲得のための、日明貿易の開発に着目して日本に渡り、秀吉より朱印状をもらって、朱印船による公認の貿易商人としてその事業に携さわる人たちがいた。その人たちが住んでいたところを三官屋敷といい、元和年間(1615~1621)伊倉に来住の謝公と郭公の2人が、そして天水町米山に住んだ均吾があり、謝公の墓は本堂山墓地にあり、郭公の墓は鍛冶屋町裏手の東屋敷にあるのだが、住居がどこにあったか今まで分ってい



3. 発掘調査に至る経過

戦時中より北牟田から伊倉南方に転住し、建築業に従事していた萩原春幸氏(29)は戦前まで住み馴れた北牟田へ復帰するために、北牟田字居屋敷41番地約120㎡の土地の払い下げを受け、水田に造成して耕作していたが、53年3月この土地に住居兼作業場を建設するため山土を埋め立ててもとの地盤を70センチほど高くした。ところがこの敷地内に遺存する二つの塚が、埋め込むことも建物をかけることもできず、北の塚は建物には支障はないので、南の塚を北塚

第36図 玉名市北牟田地籍図



田添夏喜を発掘調査担当者として、昭和53年3月3日より8日間の日程をもって発掘を行った結果、内部構造のすべてを明らかにすることができた。

4. 発掘調査の過程

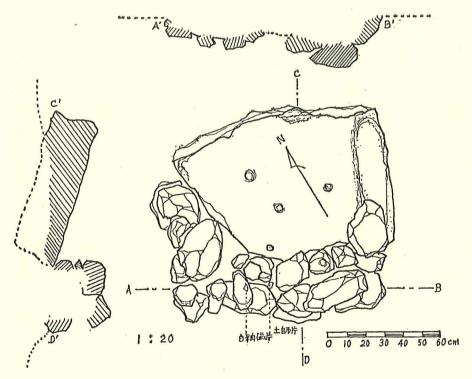
(1) 二 つ の 塚

2. 環境の項に記述の通り、北牟田字居屋敷41番地の土地が、萩原春幸氏所有となった当時、ほぼ南北に長い矩形になる地形の東辺は水路に接していて北と南に5mの間をおいた北塚は、長径3m、短径2m、高さが北の方で水田面より1mほどの小さな封土で、北裾の一部は

北隣りの水田地になだれこんでいる。南塚も北塚と同様の封土であったのが、水田造成の折多少変形したらしい。このたびの埋め立ての折、周囲が高くなり、封土は従前のまま、周りに柵を設けて土止めをしたため、塚の部分だけ低くまるくくぼみ、あたかも浅い井戸を見る状態になっていた。したがって封土の状態は把握することは不可能であった。このような封土の塚は玉名市内ではこのほかに上小田に三つ、立願寺に一つ、亀甲に一つ、中(春出)に一つ、合わせて六つの例が確認されているが、発掘されていないのでどのような内容のものであるか分っていない。然し、上小田にある一つには封土上に五輪塔の断片が見かけられるので、中世の墳墓であることは間違いないであろう。他の一つには寛永10年と同19年銘の板碑2基があり、近くに養音寺という寺跡があることから、同寺関係の墳墓であることは明らかである。北牟田の北塚では水路側のかたわらに一本の榎の古木がある。古さの割に巨木というほどの大きなものではないが、四方に根張るこぶだらけの樹根は、節くれだった幹肌とあわせ、相当の年輪を重ねているように想像される。樹木が塚の年代判定の決め手になるわけではないにしても、おおよその程度は見当がつくのである。そうしてみるとこの榎が塚と同年代のものか、後世の追植

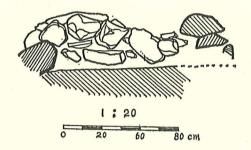
第37図

内部上層石郭実測図



かそれすら分からないが、この木は塚の造営年代の古さを指示していることは間違いないであろう。周囲は果てしないほどの水田地帯である。樹木といえば一軒屋の隣家の庭木よりほかに 広莫たる平野の見渡す限り何も見ることはできない。ただこの榎の木一本だけが塚の守りとな りある時には塚の目じるしともなって神秘さを漂よわせ続けている。

第38図 石郭東側内部正面図



(2) 内部上層石郭

二つの塚のうち今回は家屋建設の都合上急を要する南塚を発掘することになった。まず、埋め立てによって設けられていた土砂止めの柵を除去し、埋め立てられた客土を塚の周りの | m幅、70cm深さ、もとの表土面まで排土して封土の上面を露出させた。封土上は藁やもみがら、

腐蝕した雑草が被り、すでに損壊した部分も多く、形状も変形し封土としてのかたちはなくなっていた。埋め立て工事以前に計らずして生じた痕跡であることが分った。

つぎに表土を直径 2 mの広さを厚さ20cmほど 2 度くり返して排土した。腐蝕質を多量に含む 黒色土の下層に、水田表土と同質の植物細根の腐蝕したものが混合し、したがってもとの水田 面に達していることが分った。さらに下層へ掘り深めること30cmにして砂混りの赤味のある褐 色土となり数個の石群も一部を現わした。この段階で何物であるか解明することを止め、その 部分を、石群の崩壊することをおそれ、周りの土とも残して、例の通り20cmの厚さの排土をく り返すこと 2 回にして安山岩の平たい大石に突き当った。可なりに広さがある感じなので、あ るいは甕棺の蓋石か、石室の天井石かと勝手気ままに想像するがまだ状況は早過ぎる。この段 階で一応石塊群と大石の露出と清掃を行った。

楕円形を横に二分したような形の、幅90cm、110cm、厚さ25cmの大きさをもつ質のよい安山岩の平たい石が18度東(水路側)へ傾斜し、その上に人頭大くらいの石塊20個が大石の上の東と南の外郭に沿って、二個並びでほぼ三段に積み上げた状態の石組みがあった。もと西と北辺にこの状態が続いたのであろうと考えられる。またもっと上に積み上げ天井石を覆う形式の、古墳時代によく造られた石郭室のようなものではなかったか。それが水路側が地盤が軟弱であるため、上からの圧力によって沈下してその方向(東)へ傾斜し、反対側(西)が高く上へ出張ったのを、後世水田造成工事の際に邪魔だとして取り除いたもののように思われる。

石組の空隙に土師片 | 点、白釉磁器 | 点があった。白釉磁器は、少々薄弱だとする点もあるが、水田造成の時期を示す証しとみてはどうであろうか。

なお遺物については全部纒めて後述することにした。

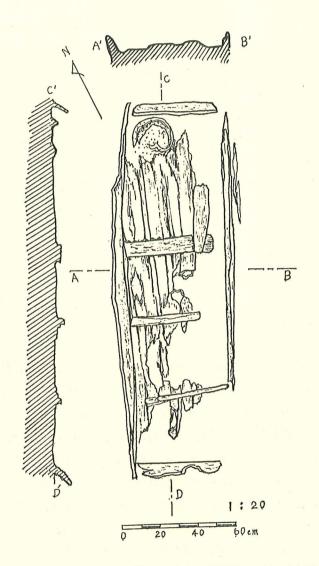
(3) 主体部

① 埋葬施設 木棺

大石とその上部の石組に掘り 当ったとき、これが塚の内部主 体とみて、この発掘は一応これ で終止符をうつところであった のが、またとないことで、念の ためにと思い、この際に主体部 の下層はどうなっているのか確 かめておく必要を考えついた。 そこで石組の実測を終えると、 その解体に取りかかった。最上 部より | 個ずつ遺物の混入には とくに気を払い、石の組み方に も注意しながら各石を取りはず し、さらに直下に据えられた大 石の据えぐあいに気を配り、重 量物揚げ機械を使用し、萩原春 幸氏の労をわずらわして引揚げ た後下層の状況を検視したが、 前項に記述した白釉磁器、土師 器の細片各々 | 点のほかには、 別段取りあげるべきほどの徴候 は認められなかった。

大石を引き揚げたあと、下層

第39図 木 棺 実 測 図(棺蓋)



を20cmほどの厚さ排土する。東側の水路の右岸にあたる土層の、本来の青褐色に対して大石のあった部分は砂混りの茶褐色を呈する土層であり、すると、この現象は主体部を埋葬した土拡だとみること以外に考えようがなかった。そう考えつくと放っておけなくなって、同様の要領をもって20cmほど掘り下げたとき、数10cm²に亘って腐蝕木片様の植物質が平面に敷かれたか

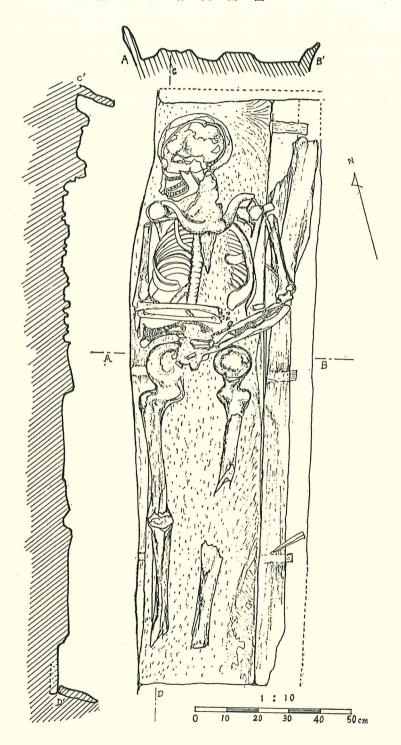
の状態で認められた。数片を取り上げて検視すると、杉皮のようである。その出土地点を基点に、四方へ少しずつ範囲を拡張しながら排土を進めると腐蝕した木片が細長くつづいて、杉皮らしいものもさらに面積を増した。このようにして長さ2m、幅50cmぐらいの長方形が形づくられた。木棺であることはもう明白となってきた。やがて骨らしい様相を呈する片々が排土に混入しているのに気付き、水洗いして検視したところ人骨にまちがいないことも分った。こうなってみると主体が別にあって、遺存状態も事のほか良好であることと埋葬施設が異例であることなど、ほぼ確実となった。それらのことに力を得て、仕損じてはならない、急いではならないと考え、細心の注意を払って除々にそして精密に腐蝕木片で境界された長方形内の排土を進めた。このようにして2日後杉皮と薄い杉板に被われた破れ目に人骨を認め、木棺の形状、用材、埋葬施設、遺体の配置状態などに至るまで把握し得るほどになった。

一方、発掘孔底は水田上面より70cmの深さ、埋立土の上面より140cmの深さになっていて、 東隣りの水路右岸壁と境する壁の厚さが50cmにおし詰められ、土層の軟弱な部分の隙間やもぐ ら穴などから洩水が激しくなって、作業に困難を生ずるようになった。粘土をねって水口を閉 塞して発掘濠底のかたわらに水溜を設け、バケツで中継して排水するなどの余分の労が加担し た。しかし常時水浸しになっているので、木棺、人骨も露出作業の進展する都度しぜんに水洗 いされ、完掘時には同時に清掃までできていたという利点があった。

木棺は北端部で横幅が50cm、中央部で少々外へはみ出し55cm、南端部で52cm、全長194cmの大きさをもつ。埋葬人体の上向きの場合、もっとも広い腰の部分にある西側壁の遺存状態の良好な部分で1cmほどしかない薄い板であったため、腐蝕していくにしたがって、人体の圧力が加わって漸次外へはみ出したのであろう。東側では南端が全体の4分の1と、北端の隅が少しく消滅していたほかはよくのこり、杉の丸太を縦に割り、20cmほどの幅で表皮側(板表)を内に向けて立て、中味正目の部分の3cm厚さの割板を同様の広さにして、側板より7cmほど内に引っこめて釘づけにし、中央部と南半部の中ほどと北に寄ったところの3箇所に、1寸小割の杉材の横木を側板に鉄釘で取り付けにし、その上に幅37cm、長さ184cm、厚さ4cmの見事な樫の柾目板を人骨の部分に敷いて底板にし、1寸小割材の横わたしをこれに下から4本ずつの鉄釘で固定し不足分は薄い杉の柾目板で補なって棺身を造った状態になっていた。

棺蓋は棺身同様の | 寸小割の杉角棒を中央に | 本、南半部の中央に | 本、北半部の中央に 8 cmの幅の薄手の杉板をそれぞれ横にとおし、内がわ (裏) は薄い杉板数枚を継ぎはぎにして、横木に釘でつけた形跡が認められた。なお棺蓋上面でも、棺床でも杉皮の夥しい出土を見たのであるが、これについては後項人骨で記述することとする。

木棺の遺存が極めて良好で、構造が完全に近く把握でき、さらには木質までも判定可能であったということはめったにないことだと思うが、これは周囲の土質が、少量の砂土を含む腐蝕 質の多い泥土質で水田地帯特有の水分を多く含む泥岩層の中にあったからであることはいうま



でもない。

② 主 体 人 骨

主体の人骨はまったく完全なすがたで遺存していた。前項に述べた通りの木棺内、床板全面に杉皮数枚を重ねて敷き、その上の西に片寄せられた樫板のま上にあたるところに、上に向き足をのばし、頭を北にし顔を西に向け、右手をやや上位にした両手は何かを抱く格好で腹の上になり伸展葬の形式におさめられていた。弥陀のお浄土は西にありという仏教伝来後の浄土宗の頭北西顔の葬法によるものであるかどうか、それはよく分らない。

筋肉や内臓が腐蝕するに伴い、上からの土圧が加わって人体は圧迫されて、全体は扁平になり、頭骨も押しつぶされて中は大きくくぼんで底板にくっついていた。両手には何か異質の細長いものが2本ずつ平行についたのが認められた。よく洗って検視すると、細糸数本をあつめて八つ組みくらいに編んだひもであることが判明した。さらにその端末に同じものを $7\sim8$ 回 横巻きに巻きつけてあった。

ひもは袖括とみるよりほかに思い当たるものがなく、果してそうだとすれば、袖括のある形 式の着物を纏っていたということになる。

脚部の床面が多少低くなっていたので、排土排水の都合上誘導路を通す際に人骨に気付かず 欠損した箇所があるが、その部分は両足先と、両膝の部分である。人骨遺存の事実を知る端緒 をつくったのがこの部分の破片であった。

人骨は一見して全体的に太く、たくましく、歯も全部ついており何らの病状も認められず、 身長も 180 cmの巨体を有する熟年30才前後の男性と推定される。死因については決め手になる ものも発見できず不明である。

③ 副葬品と年代について

塚の築かれた時代を判定するとき、その決め手となるのは、どうしても副葬品、遺物が重視される。そのことで、この場合では塚の内部主体に後世の破壊箇所もなく、副葬品が納められたとしたとき盗掘も考えられない。とくに主体部が原状を完全に止めているので、発掘作業では副葬品の配置に特段の留意を払ったにも拘わらず、あまりみることができなかった。それにあたるものとして、外面を黒漆、内面を茶色味を帯びた朱の漆で塗られた木椀の細片 | 点が人骨の左ひじ付近の棺側に付着して見つかっている。そのほかに上層の石組中から土師器細片と有田焼細片各 | 点と、木棺外北側より細片土師器 | 点の出土ぐらいであった。

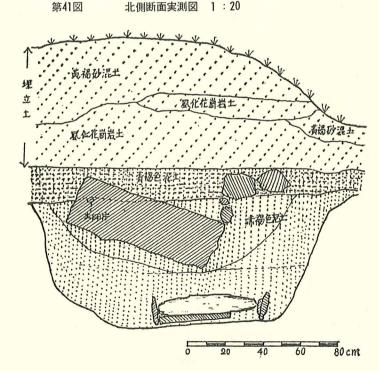
いずれも4点細片ばかりの取るに足らぬ貧弱なものであるが、木椀について少しく考えてみることにしよう。昭和48年玉名市高瀬本町通りの繁華街で下水道工事にかかって各種多数の遺物が発見されて、中世上流階級の住居群の遺跡であることが確認された。それが何で分ったか、というのは言うまでもない多数出土の遺物である。地表下3 mの深さのところから、中国貨銭10数個、青磁碗破片10数個、木材片、木製箸無数、獣魚骨多数、マゴンドウ鯨の骨大型10

数個、土師器の糸切皿若干、瓦器質土器は釜、にな、にしなどの小巻貝多量が挙げられるなかに、木製漆仕上椀 | 個が含まれている。これは外側は黒漆地に朱色で笹の葉をちらし、内側は朱の漆塗りに仕上げてあり、北牟田塚出土椀は細片ではあるが、口縁部がついていてその部分から下へ彎曲するスロープの状態と漆仕上げとその配色に至るまで双方の共通点が多く、時期、製作の場所等も同じだと思われる。

10数個の貨銭は「天禧、天祐、元豊、政和」他すべて1100年代中国北宋の年号を刻銘するものばかりであった。因みに近郊地で貨銭の出土例は玉名郡玉東町西安寺で 459 個あり大半が北宋銘を見、玉名市築地の今見堂遺跡出土の20数個もまた同様の北宋のものばかりである。このことから推せば、同時代の銭貨ばかりでなく、各遺跡から青磁、木椀など共伴しているので、北塚の場合、青磁も貨銭も出ているわけではないが、木椀一つでも同時代のものであろうということは推察がつくのではあるまいか。また同塚遺物の土師片は、平安時代から鎌倉時代にかけた特有のもの、さらに挙ぐれば人骨の両腕に付着した 2 条ずつのひもを袖括と見るとすれば、当代の衣服に水干、直垂長絹の類が考えられる。そう考えてみると出土のひもも年代判定の有力な決め手の一つとなるであろう。

なおまた木棺について検討するならば、下益城郡城南町塚原古墳群発見の木棺では、弥生時

代から古墳時代へ推移す るころのものだと聞いて おり、そうだとしたら最 古の木棺だといえる。厚 板を用い、前後の木口板 を両側壁板の内にはさみ こみ、さらにわずか内の 方へずらして装着した組 み方になっているのに対 して、玉名市伊倉堂山の 報恩寺跡墓地にある江戸 時代の明人振倉謝公の木 棺は、四隅を直角に合 せ、大型鉄釘4~5個ず つで接合して造り、それ が漆喰郭室の中に収めら れていた。勿論それらの ものをもってその時代の



木棺を代表するというわけではないが、それぞれ特徴をもっていて、木棺の研究資料とはなるであろう。塚原古墳群発見のものはもっと古い形式で、日本最初の型ともいえる。明人謝公の木棺は明の型式か日本型であるかその点が問題だが、墓標が日本式なので主体部も同様と見て然るべきであろう。その中間期のものが北牟田木棺だということも考えてみた。

いろいろと述べたが、北牟田塚は中世期に築かれ、北牟田地方を開拓し、産業、文化を進めた青年支配者を葬むった墳墓であると結びたい。

5. あとがき

北牟田塚2基のうち南塚一基の発掘に至った端緒から発掘調査の結果に及んで述べた。なにしろ、玉名地方ではこの種の丸塚と称されるものや、同様の封土をもつ墳墓は山手の集落の中や丘陵の上、また集落付近の峽い水田中に分布していることは前にも述べたのであるが、しかしこれらがすべて中世の単独墳墓であることは断定しがたく、発掘して始めてそれがはつきりするのであることは申すに及ばない。ところが残念にして発掘された例がなく、したがってこの種(中世)の墳墓の発掘は始めてのことで、比較検討するための資料がなく、さらに加えて発掘はしたが副葬品がなく、出土した遺物も取るに足らないものばかりであったため、年代の判定や被葬者の身分、当地方の社会組織等を考えるのに非常な困難さを覚えずには居られなかった。

昭和23年ごろ、荒尾市本村、玉名市高瀬間の産業道路(現在の国道 208 号線の一部)の開設工事が進められ、その後この道路はさらに双方に延長されて現在の国道 208 号線となった。その折玉名市築地字今見堂付近で遺跡にかかった。そのとき多数の五輪塔の断片や青磁皿や、土師器の糸切皿にあわせて20数個の中国北宋時代の貨銭等が出土し、そのかたわらに土葬人骨 2 体も発見された。ここの地名が「今見堂」というところから、中世期の寺院今見堂跡であることが明白となった。出土の人骨は土葬のまま頭部はほぼ完全で、他は大腿部のほかはほとんど消滅してしまっていた。頭部を南へ向け南北に伸ばして埋葬されていた。年代は五輪塔、糸切皿、青磁等の遺物が示すとおり平安時代から鎌倉時代のもの、ましてや出土の貨幣がそのものずばりその年代を示している。ここの場合北牟田塚と私の考えたうえで一致共通する点は成立の年代である。他は性格的に趣を異にしているが、人骨の埋葬が仏教伝来以後といえど、北牟田塚のような「頭北西顔」の法式に限られたものでないこともうなずけるであろう。

次の事例としてさらに考えてみたいのは、前にも述べた玉名市高瀬の出土例である。その一つである木椀は、外は黒漆地に朱の笹模様を浮かし、内は朱漆りという普通型の高台付きの漆器である。同伴出土の青磁では高台付碗や、その種の破片が多かったなかに白の象嵌入り鶯色地の小さな高坏が含まれている。いずれも中世にもっとも多い種類のものと見られるし、それ

に加えて前記の今見堂遺跡とまったく同じ中国北宋貨銭10数個がここの年代を実証している。 共伴の漆器の腕が、北牟田塚のが細片ではあるが、口縁部とその胴部にかかる彎曲の状態でよ く分るようにほとんど同大同形である。年代推定の好資料としてここで用いた。

埋葬人骨の腕のひもについては、着衣の袖絞りひもとみて、平安時代にはじまり、中世盛んに官人、武家たちのあいだに用いられた水干直垂その他にひもをつける。したがって被葬者はその類を着用する身分にあった人だということになり、北牟田をはじめ現在の川島、小野尻、小島までぐらいは支配したろうという見方まで生じる。

北牟田塚の発掘によってこの地方の歴史を知ることができ、また中世の支配者級の葬法も同時に解明し得たのである。学界に及ぼす影響もまた大きいと思う。地元の人たちはむかしは海であったのが、加藤清正が横島に石塘を築いて以来陸地になったと信じていたが、発掘によって清正以前すでに陸(島)であったことを実証した。

塚の名称については、古墳時代の古墳としては所在地の上から考えても形体上から見ても、 趣が異なるようで古墳名では間違いになるし、地元で塚と呼称されているのでそれをとり、所 在地の小字名の居屋敷だが同名は県下至るところ極めて多いので、混同しやすい。大字名であ ったら別に同じ名称も、遺跡もないので「北牟田塚」と呼ぶことにした。

この発掘調査が円滑に進み、大成功のうちに終了し得たことは、市教育委員会の方々、土地 所有者萩原春幸氏御夫妻、地元の代表出ロ一氏等の熱心な御援助によるものである。茲に記し 止めて深謝の意を表したい。 (田添夏喜)





(上) 北牟田の集落と北牟田塚の位置(矢印) 右北塚・左南塚

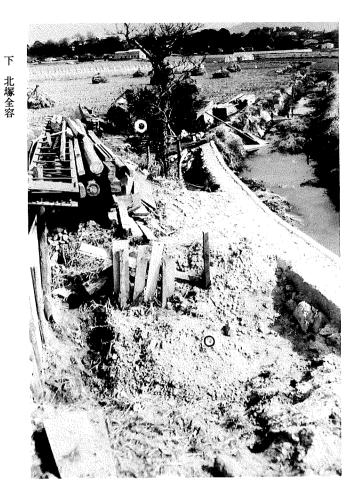


(下) 北塚全景(北方より)

	•	

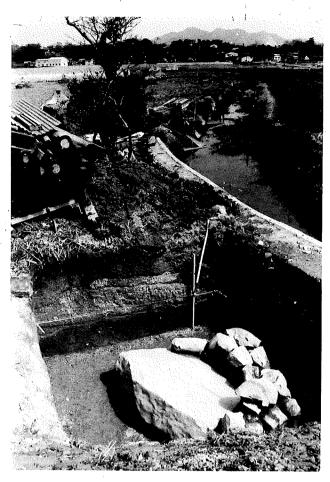
図版 20 北牟田塚遺跡

上 北牟田塚より望む東方の景観 遠景は伊倉の台地 ○印の上方は北塚、手前は南塚

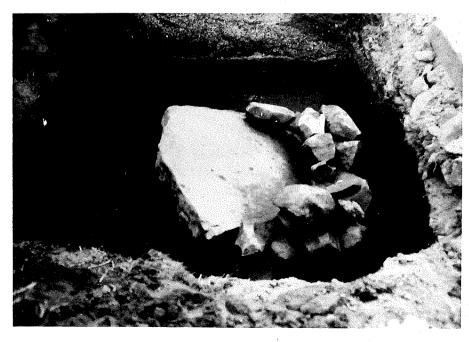




図版21 北牟田塚遺跡



上 露出された内部上層の石組と東方を望む景観下 同上石組拡大



図版 22 北牟田塚遺跡



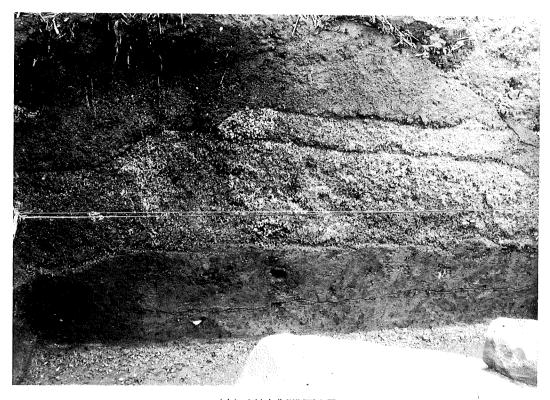
(上) 内部上層の石組拡大。下の白い部分は下に敷かれた大石



(下) 大石の引き揚げ作業 遠景は金峰山系三の嶽(左)、二の嶽(右)、



図版 23 北牟田塚遺跡



(上) 土坛内北側断面土層



(下) 内部主体の木棺々蓋



図版24 北牟田塚遺跡



(上) 木棺々蓋上半部 杉の皮と板の使用状態を示す

左端は頭骨横断面、上の横長いのは 木棺々身左側板の一部



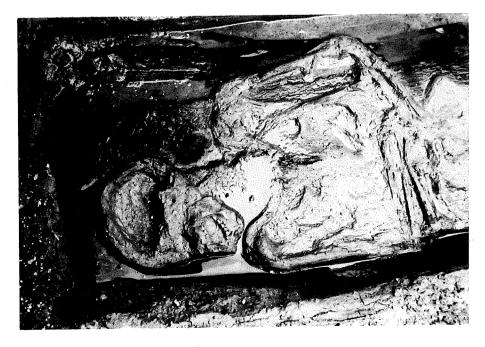
(下) 同上主部拡大

この部分の下に主体人骨胴部がかくされている

図版25 北牟田塚遺跡

上 露出清掃された主体人骨の全容





·			

図版26 北牟田塚遺跡



(上) 主体人骨下半身部拡大

樫板の木目も鮮やか



(下) 主体人骨 顎骨部拡大

左に縦に湾曲するは左鎖骨





(上) 主体人骨の左腕に付着するひも



(下) 左腕に付着するひも拡大



玉名市文化財調查報告 第3集

北牟田塚墳墓

昭和54年3月31日

発 行 玉名市教育委員会

玉名市繁根木88—1

印 刷 株式会社 秀 巧 社

熊本市国府 4 丁目10—18

